

2年間の成長を可視化する介護実習ルーブリックを用いた教学 IR 分析

An IR Analysis Using a Long-term Care-work Practicum Rubric that Visualizes Student Growth in Two Years

鷲 尾 敦

Atsushi Washio

(要約)

高田短期大学高等教育研究会では、科研費助成による「ルーブリック評価のIR分析を通した介護実習の改善手法の開発」研究に取り組み、開発した介護実習評価用ルーブリックを用いて実習施設指導者と学生による評価活動を進めた。評価データから実習の様子をアセスメントしながらルーブリックの改善を繰り返した。在学期間の全ての介護実習でルーブリック評価を行った学年が2021年3月に卒業するにあたり、この学年がどう成長したかをルーブリック評価データと卒業前アンケートから探った。評価データから日本人学生、留学生、個々の学生の成長の様子を可視化することで課題を見つけることができ、アンケートからルーブリックによる評価活動が学生の成長に寄与していることを確認した。

(キーワード)

介護実習、介護実習評価、ルーブリック、教学IR、実習成果の可視化

1. はじめに

1. 1 本研究の背景

学修成果の可視化や大学の三つのポリシーについての諸課題を検討することを目的に、学長命により2016年に高等教育研究会が発足した。介護実習における評価の平等性、評価の見える化の課題など評価の改善について議論を深め、介護実習評価における課題解決の方向性を検討した。さらに、介護実習の評価にルーブリックを用いることを提案し¹、ルーブリック開発を進めた²。従来の評価は、「評価のつけ方のガイドラインがない」「指標の意味や基準が明確でないので評価がつけにくい」「施設指導者の経験の違いによって評価の基準が異なっている」「なぜその評価結果になったのか学生はわからない」「学生にとってどこまでできているのかわからない」、「次の実習に向けての目標がわからない」などの課題があった。総括評価のみ意識し、評価によって学生の成長を促す形成的評価の面を考慮していないことが問題であった。課題解決の方向性は、「実習先の違いによる評価のブレを少なくする」「学生が現在の自分の力量を明確に理解できる」「学生が今後の目標を明確に知ることができる」という評価の平等性と評価の可視化を目指したものであった。その後、開発したルーブリックを本学の介護実習で用いるために実習先施設指導者に説明を行い、指導者及び学生の評価活動を始めた。ルーブリックは一度作成すれば終わりではなく、結果データを用いて学生の状況を把握するための分析を行うと同時に、指導者たちにアンケートをとり、さらにインタビューするなどして、ルーブリックの改善を何度も行ってきた^{3~7}。

検討を始めた2016年当時は、看護系でのルーブリックを用いた実習評価についての研究はあったものの、介護実習そのものの評価にルーブリックを用いる報告は見当たらず、先陣を切ることとなった。

ほぼ同じころ、林ら⁸、宮本ら⁹、柊崎ら¹⁰など、介護実習にルーブリックを用いる研究が散見されるようになった。しかし、当研究会で開発した70以上の評価の観点があり実践的な実習内容にまで踏み込んだ評価を用いたものは見当たらない。また、2年間に行われる三つの実習全てに使え、学生の成長の記録としてポートフォリオになるものは見当たらない。

1. 2 開発ルーブリックの特徴

開発したルーブリックは、三重県介護福祉士養成施設協議会が作成した「三重県版 介護実習の手引き 介護実習ノート」に記載の「実習評価の評価基準」を参考に2016年から検討を始め、2017年最初に開発したものは、実習ノートにある5つの領域のうち「実習態度」の1領域のみであった¹。2018年9月の「介護実習Ⅲ」にて全てを網羅したルーブリックを初めて用いた³。そのルーブリックは、5領域、16の評価項目、さらに25の着眼点があり、65の評価指標（評価の観点）からなっている。三つの評価基準があり、評価の着眼点ごとに点数を集計して、従来の評価票に転記していた。その後、毎年ルーブリックを改善し、2020年には、5領域、16の評価項目（実習Ⅰは15）、26の評価の着眼点（実習Ⅰは19）、評価指標は79（実習Ⅰは57、実習Ⅱ、Ⅲは77）となった⁷。本報告の対象学生が利用したルーブリックの構成を表1に示す。各指標に三つの段階の記述語があるが、学生の状況がその間にあたる場合など評価する指導者にとって微妙なケースがある場合に、間に評価を落ち着かせることもできるよう、評価のガイドラインを策定し指導者に配付した。評価の着眼点ごとにコメントを書けるようにすることで指導者からのメッセージ、自己評価における内省が深まるようにした。個々の指標の学生へのフィードバックに主眼を置き多様な指標を単純に合計することに意味がないことから集計は行っていない。

表1 ルーブリックの着眼点までの構成と着眼点における評価指標の数

領域	項目	着眼点	指標No.	実習Ⅰ	実習Ⅱ	実習Ⅲ
実習態度	積極性	意欲的に取り組む姿がみられる	1-7	4	7	6
	協調性	職員・利用者・実習生との協調性がある	8-12	5	5	4
	守秘義務	利用者のプライバシー保護に配慮できる	13-16	4	4	4
	礼儀	規則を守り礼儀正しく接遇できる	17-21	5	5	5
	健康管理	自分の健康に留意できる	22-23	2	2	2
自己目標	目標設定・実践・振り返り	自分の立案した目標に向かって実践できる	24-28	5	5	5
		振り返り	29-30	2	2	2
コミュニケーション	意思疎通を図る	利用者との意思疎通が図れる	31-36	4	6	5
		職員との意思疎通が図れる	37-38	2	2	2
介護活動	(受け持ち)利用者理解	利用者の生活が理解できる	39-43	4	5	5
		利用者の基本的な介護ニーズを知ることができる	44-45	2	2	2
		生活者として身体的・精神的・社会的な側面から個別性が理解できる	46-48	0	3	3
	生活支援技術	介護実習を通して、利用者の望む生活が理解できる	49	0	1	1
		個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できる	50-56	3	7	7
		利用者のニーズに合ったレクリエーションの企画と実施ができる	57-58	1	2	1
	福祉用具の適切な使用	利用者に応じた正しい使用ができる	59	1	1	1
	受け持ち利用者の介護過程の展開	介護に必要な情報の収集ができる	60-61	0	2	2
		情報を分析し、介護ニーズや課題を明確にできる	62	0	1	1
		実施可能で具体的な介護計画が立案できる	63	0	1	1
		介護計画に則した的確な介護実践ができる	64	0	1	1
		介護実践の評価ができる	65	0	1	1
施設理解	観察	介護場面を観察して、適切な反応や行動ができる	66-67	2	2	2
	記録	介護場面を的確に表現できる	68-73	5	6	6
	報告	利用者の変化や反応など、報告を要する事柄を判断し、報告できる	74-76	3	3	3
	施設の理解	実習先施設の概要が理解できる	77	1	1	1
職種の理解	他の職種の専門性を理解し、介護福祉士の役割と、専門職としての連携と協働の意味がわかる	78-81	2	4	4	4

(実習Ⅱは2019年度実施のため、本文記載の77より多い合計81指標である。)

学生は個々の指標について自己評価をし、指導者からの評価も確認することができる。ループリックによる自己評価は学生の内省の機会となる。

これにより、課題であった「従来の評価指標のつけ方のガイドラインがない」「施設指導者は、指標の意味や基準が明確でないので評価がつけにくい」「施設指導者によっては評価の基準が異なっていた」というような課題はほぼクリアされたと考える。また、学生にとっては「なぜその評価なのかわからない」「今どこまでできているのかわからない」「目標がわからない」などの課題もクリアされた。「実習先の違いによる評価のプレを少なくする」「学生が現在の自分の力量を明確に理解できる」「学生が今後の目標を明確に知る」という目的が達成された。

1. 3 本報告の目的

本学では、2年間で3回の介護実習を行っている。この3回全てでループリックを用いた実習評価を行なった初めての学年が2021年3月に卒業した。この学生たちが3回の実習でどのように成長したかをループリックデータの可視化でどう確認できるかが本報告の第1の目的である。また、学生にとってループリックを用いた評価活動が、学生の課題や次の目標を見つける機会となっているか、そこに課題はないかを確認することが二つ目の目的である。これらを確認した後、ループリックの改善や評価を受けての指導方法などの改善を進め、介護実習評価活動のPDCAサイクルを確立する考えである。

2. 本報告の研究データ取得の流れ（卒業までの介護実習と評価活動）

対象とする学生は2019年度入学生で、日本人学生13名、留学生19名である。実習は、本学では介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと分けており、介護実習Ⅰは、社会福祉士介護福祉士学校指定規則第五条十四に規定されているところのイの実習であり、介護実習Ⅱ、Ⅲはロの実習である。介護実習Ⅰは、サービス利用者の生活の場として、居宅サービスを中心とする多様な介護の場における実習である。利用者の理解を中心とし、利用者・家族との関わりを通じたコミュニケーションの実践、多職種協働の理解、介護技術の確認等を行うことに重点を置く実習である。主に訪問介護やデイケアサービスを中心とした施設で実習している。ロに規定されている実習である介護実習ⅡおよびⅢは、個別ケアのための継続した実習で、一つの施設・事業等において一定期間以上継続して行っている。利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった一連の介護過程を継続的に実践することに重点を置いた実習である。老人保健施設や特別養護老人ホームなどの施設で実習を行っている。各実習の時期、評価データが回収できた人数は次の通りである。

- ①介護実習Ⅰ：2019年8月実施 1年夏 90時間約10日間、日本人学生13名、留学生19名
- ②介護実習Ⅱ：2020年2、3月実施 1年末 180時間約20日間、日本人学生12名、留学生17名
- ③介護実習Ⅲ：2020年9月実施 2年次 180時間約20日間、日本人学生10名、留学生17名

各実習終了後、各施設では実習指導者がループリックを用いて評価を行う。実習指導者は、本学担当教員だけに各学生の総括評価として総合点数を提出するが、学生には提示していない。学生は、実習前にループリックを見る機会があり、どのような視点があるかを確認して実習に臨む。実習を終えた学生は学校でループリックを用いて自己評価をする。後日、実習指導者からの評価が配られ、実習時の状況、

自己評価との違いを確認することで、次の実習に向けて自分の状況を把握し、自分の課題を明確にしている。

3. ルーブリック評価結果

3. 1 全指標の自己評価と施設指導者評価の変化

2019年入学生（2021年3月卒業生）の各実習における施設実習指導者によるルーブリック評価と学生の自己評価の全指標の平均値を、留学生、日本人学生別に集計した結果が図1である。

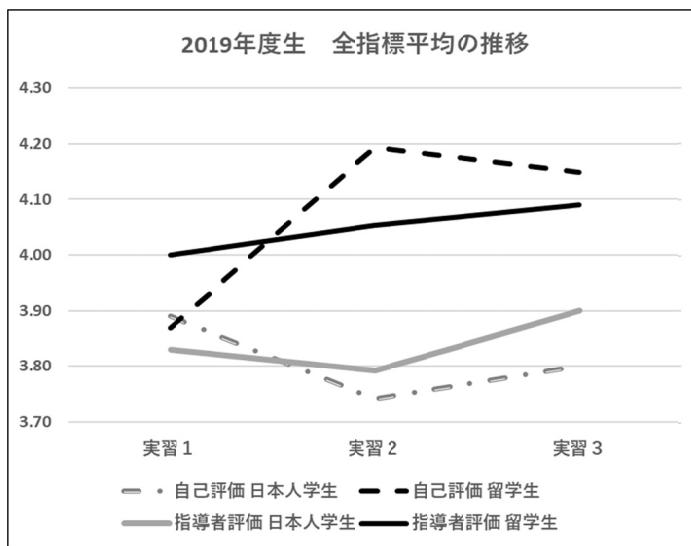


図1 全指標の単純平均の推移

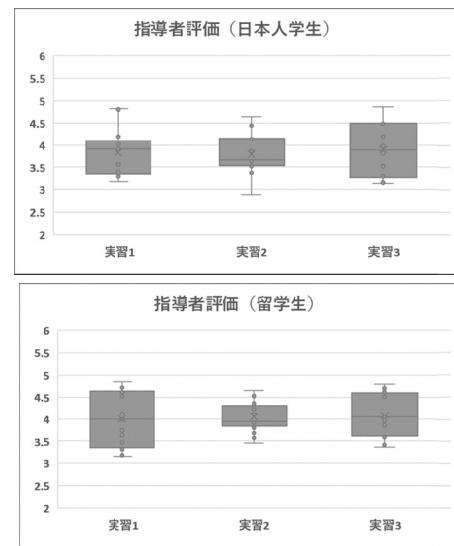


図2 指導者評価の全指標平均値の箱ひげ図

これを見ると、留学生は、指導者評価も自己評価も日本人学生に比べ高い傾向にある。ただし、実習Iではこの学年の留学生は低かった（例年留学生は実習Iから自己評価が高いことが多い）。留学生の自己評価が実習IIIで下がるが指導者評価に近くなっている。

留学生も日本人学生も、指導者評価は実習IIから実習IIIで上がっている。実習IIで指導者評価は下がっているが、実習Iと実習II、IIIとでは実習の特徴が異なることから、IからIIの変化よりもIIからIIIにかけての変化に着目した方が良いと考える。

留学生に対する指導者評価は高い傾向にあるが、指導者の聞き取りから「言葉のハンディ分評価を甘くしている」という結果と見ることもできるし、留学生の中には社会人経験を積んだ学生がいることから、コミュニケーション力や意欲等が若い日本人学生よりも高いことも影響しているかもしれない。あるいは、もともと海外で学ぼうという意欲があることが評価を高めている原動力かもしれない。

指導者評価の指標の平均値を図2の箱ひげ図で見ると、日本人学生、留学生ともに実習IIでのばらつきはあまりないが、実習IIIでは評価の高い学生と低い学生との差が開きばらつきがある。さらに日本人学生の上位の伸びが大きく見える。

実習IIIの自己評価、指導者評価の全指標平均値の分布を図3、4に示す。留学生の自己評価は高い方に集まる一方、日本人学生は低い方に広く分布している。指導者評価は留学生も日本人学生も同じような傾向だが、若干留学生の方が高い方に、日本人学生の方が低い方に分布している。また日本人学生、

留学生ともに「4.6 以下」以上の高い評価を指導者から受けている群は、他の学生と差がある。

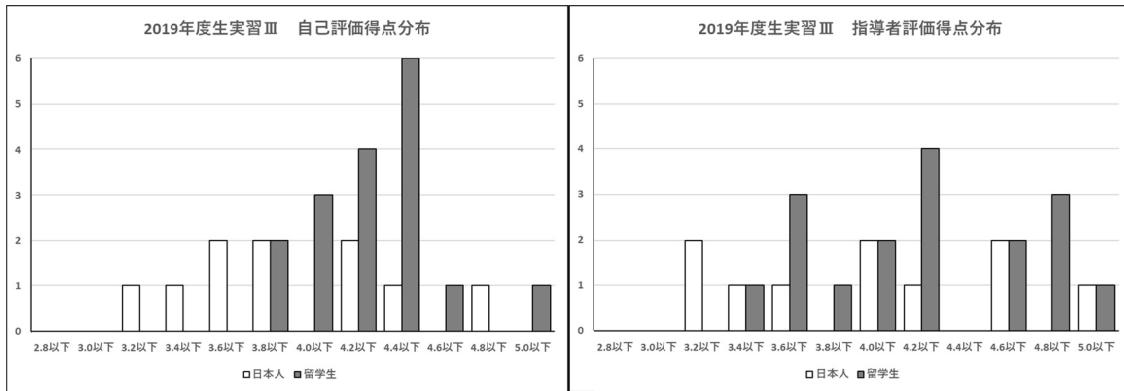


図3 実習Ⅲの全指標平均得点分布（自己評価） 図4 実習Ⅲの全指標平均得点分布（指導者評価）

3. 2 自己評価と施設指導者評価の相関分布の変化

学生の自己評価とその学生に対する指導者評価との相関を調べた。「-0.4～-0.2:弱い負の相関」「-0.2～0.2:相関がない」「0.2～0.4:弱い正の相関」「0.4～0.7:正の相関」として、その件数の割合を日本人学生、留学生別にグラフ化したのが、図5～7である。相関が強ければその学生は「指導者と同様に、

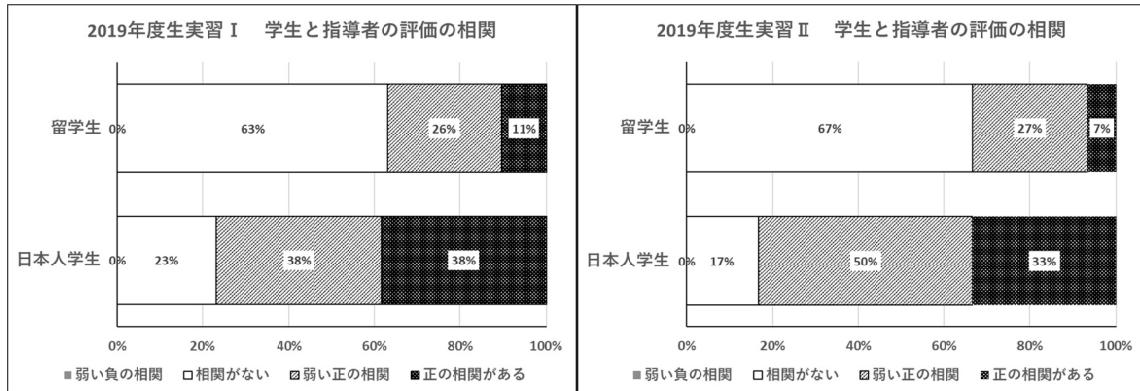


図5 学生と指導者の評価の相関分布（実習Ⅰ）図6 学生と指導者の評価の相関分布（実習Ⅱ）

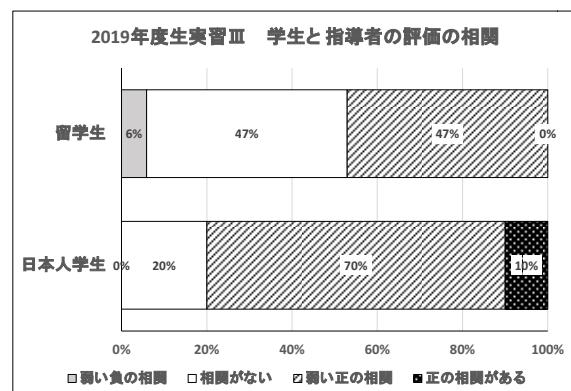


図7 学生と指導者の評価の相関分布（実習Ⅲ）

実習評価ができる」「実習で求められる観点と基準を理解している」と考えることができる。いずれも留学生よりも日本人学生の方が「正の相関がある」「弱い正の相関がある」をあわせた割合が高い。図7の実習Ⅲの結果では、留学生は「正の相関」こそ0になったが「弱い相関」の割合は10ポイント程度増えた。しかし、中には「負の相関」である者もいた。留学生の半数余りはループリックの理解がなかったとも言え、言葉のハンディ及び文化の違いなどの影響があるとは言え今後解決していくべき課題であろう。日本人学生についても2割程度の学生の理解がなかったと考えられ、こちらも同様に改善していかなければならない。

図8、9は、相関係数の分布幅の変化を示す箱ひげ図である。日本人学生の相関係数のばらつきが実習II、IIIと進むに連れ少なくなっている。相関がない学生が減っているものの高い相関を持った学生も少なくなっている。留学生も特に高い学生がいなくなってしまっており、上位が育っていないということであり、こちらも課題と言える。留学生には、逆相関に至る学生がいることも図9からわかる。

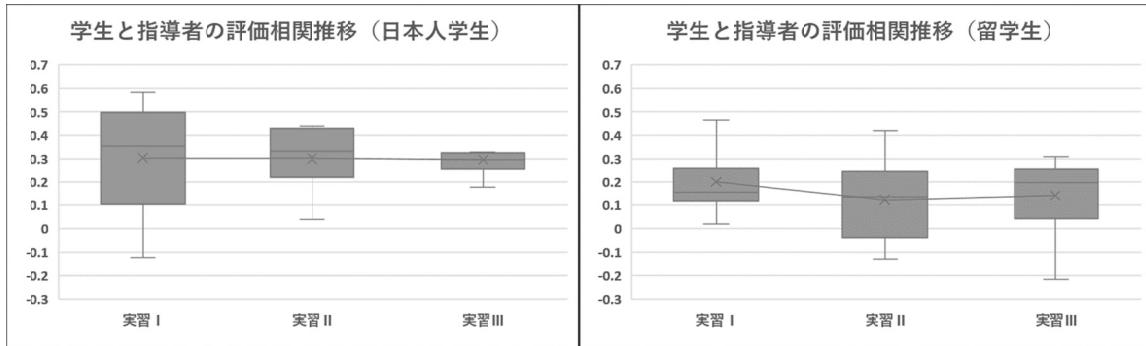


図8 日本人と指導者の評価の相関分布推移

図9 留学生と指導者の評価の相関分布推移

3. 3 大領域の施設指導者評価の変化

ループリックの評価の観点は、「実習態度」「自己目標」「コミュニケーション」「介護活動」「施設理解」の5領域からなっている。その各領域の変化を図10、11に示す。「実習態度」は日本人学生も留学生も高い評価を得、「自己目標」が次である。特徴的なのはコミュニケーション能力で、日本人学生、留学生ともに実習Iの評価は低いがその後着実に高くなり、実習でのコミュニケーション能力の成長ぶりが見える。また、留学生は、実習Iでは領域によって評価にばらつきがあるが、実習IIIでは比較的高い位置でどの領域も落ち着いており、苦手な領域がなくなってきたと考えられる。一方、施設理解は評価が低いままである。以前から評価が難しい評価項目であり、ループリックの改善を検討する予定である。

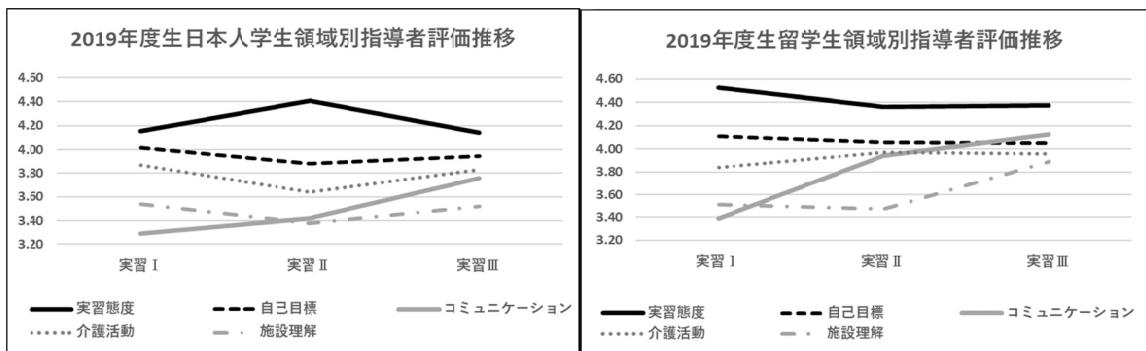


図10 日本人学生の領域別指導者評価の推移

図11 留学生の領域別指導者評価の推移

3. 4 「実習態度」領域の施設指導者評価の変化

「実習態度」領域には、「積極性」「協調性」「守秘義務」「礼儀」「健康管理」の項目があり、指導者評価の変化を図12、13に示す。全体的に高い評価を得ている「実習態度」であるが、「積極性」については、日本人学生、留学生ともに低い。これはこれまでの卒業生たちも同様の傾向にあった。ただ、実習がII、IIIとなるに連れて低いながらも向上している点は評価できる。「礼儀」については、実習Iが一番よく、II、IIIとなるにつれ日本人学生は評価が下がる傾向にあり、これは課題である。「協調性」も実習IIからIIIで大きく下がっており、これも大きな課題であり原因を明らかにする必要があろう。

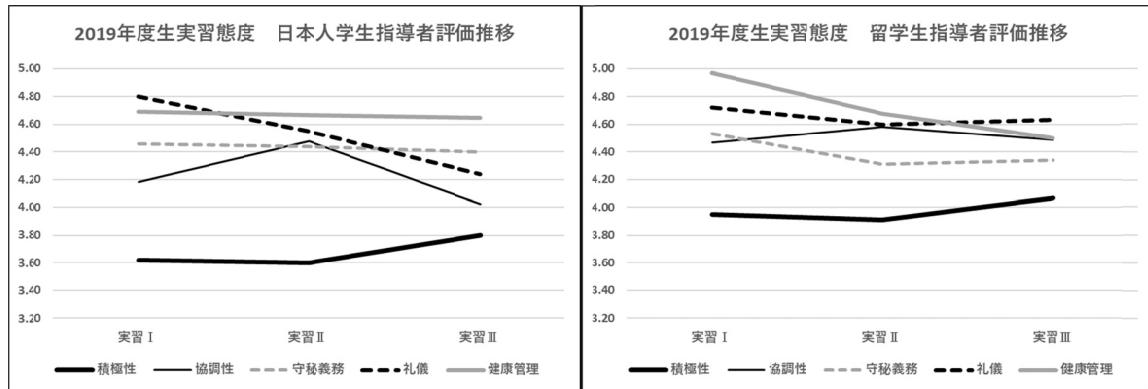


図 12 日本人学生の実習態度評価項目別評価推移

図 13 留学生の実習態度評価項目別評価推移

3. 5 「コミュニケーション」領域の施設指導者評価の変化

「コミュニケーション領域」の指導者評価は、図 14、15 を見ると、「利用者との意思疎通」が「指導者との意思疎通」よりも評価が高い傾向にある。特に実習 I では留学生も日本人学生もそうであった。留学生は、実習 II で指導者と利用者との意思疎通に関しては同様に高い得点となり、さらに実習 III で上昇している。日本人学生は実習 III で評価は高くなるものの、「利用者との意思疎通」に比べ「指導者との意思疎通」とは実習 I、II と同程度の開きがあるままである。将来の介護現場ではチームでの介護であるからこそ職場での同僚や上司、部下とのコミュニケーションは大事となる。日本人学生に対し、実習での指導者とのコミュニケーションの重要性を強く指導する必要がある。

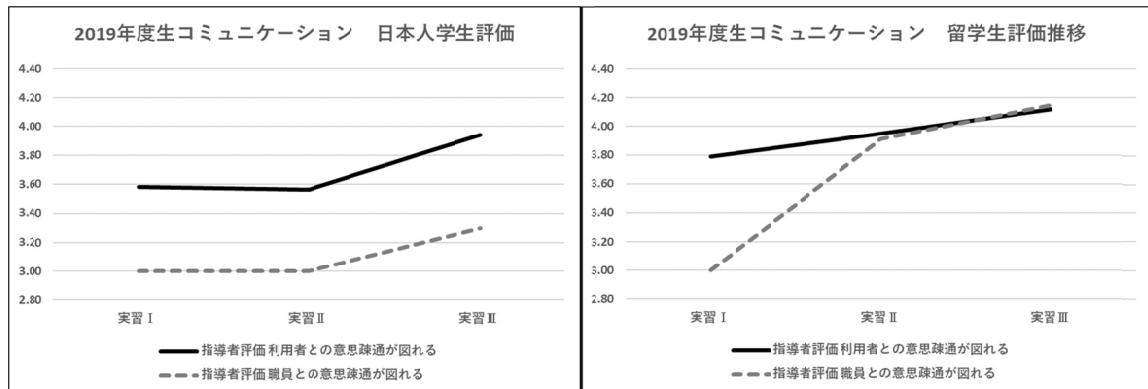


図 14 日本人学生のコミュニケーションの変化

図 15 留学生のコミュニケーションの変化

3. 6 「介護活動」領域の自己評価と施設指導者評価の変化

図 16、17 は「介護領域」の指導者評価の各評価項目の変化を示す。「(受け持ち) 利用者理解」が、日本人学生、留学生ともに、実習 I では一番低い(実際には受け持ち担当がない)が、実習が進むごとに評価が高くなっている。実習 I と実習 II、III とでは、実習の種別が異なっているためか、実習 I から実習 II に向けて、「生活支援技術」「福祉用具の適切な使用」が日本人学生では一旦評価が低くなっているが実習 III では「受持ち利用者の介護過程の展開」「観察」などとともに実習 III で高くなっている。一方、留学生は「受持ち利用者理解」以外全て実習 II より実習 III が低い。「記録」は、全実習で日本人学生と留学生は低い評価である。留学生は日本語能力の問題があるが、日本人学生に成長が見られないのは残念であり指導の強化が必要であろう。「報告」は、実習 II は良いが実習 III では下がっている。特に

日本人学生の下がり方は顕著である。実習Ⅲで求められる水準が学生が思う以上に高く、指導が必要であろう。

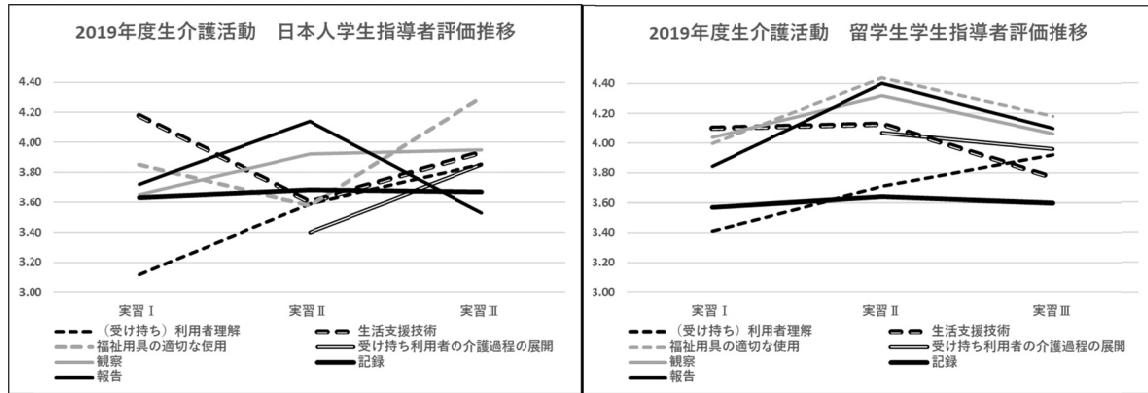


図 16 介護活動領域の指導者評価の変化（日本人学生）

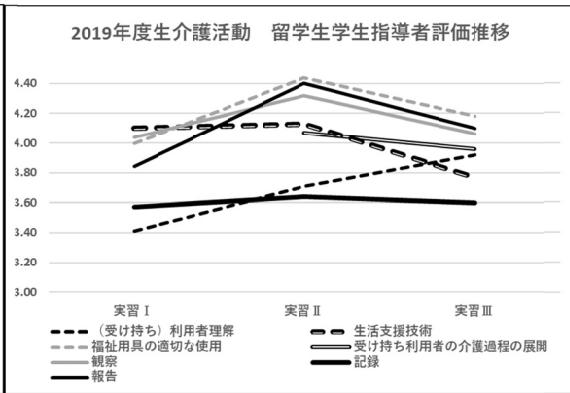


図 17 介護活動領域の指導者評価の変化（留学生）

3. 7 実習Ⅲにおける学生の強みと弱み

図 18 は、日本人学生と留学生について、実習Ⅲにおける全評価指標の平均を順に並べたグラフである。領域の順に並べられた全指標の山や谷を見比べることで、同じ領域の中での強み弱み、自己評価と指導者評価の差など特徴的なところを確認できる。なお、X 軸の番号は表 1 に示す「指標 No.」である。

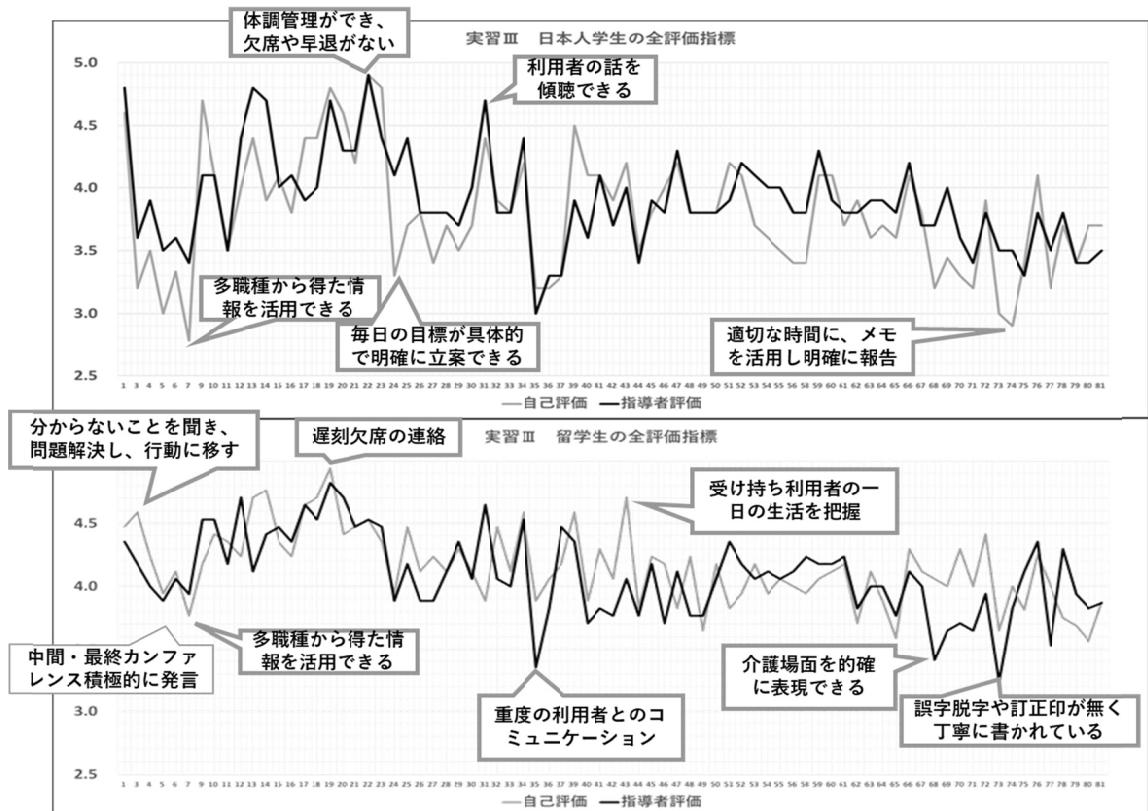


図 18 実習Ⅲにおける全評価指標の自己評価と指導者評価の平均

3. 8 様々な学生の変化パターン

図 19 は、個々の学生の実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおける自己評価と指導者評価の全指標平均をプロットしたものである。それぞれのグラフは、学生の強み弱みの変化の典型的なパターンを数点例示した。これを

見ると、「自己評価が常に指導者評価より高い」「指導者評価が下がる一方である」「指導者評価が常に自己評価より高い」「最後によくやく指導者評価に自己評価が追い付いた」「自己評価も指導者評価も順調に高くなっている」などのパターンがあった。

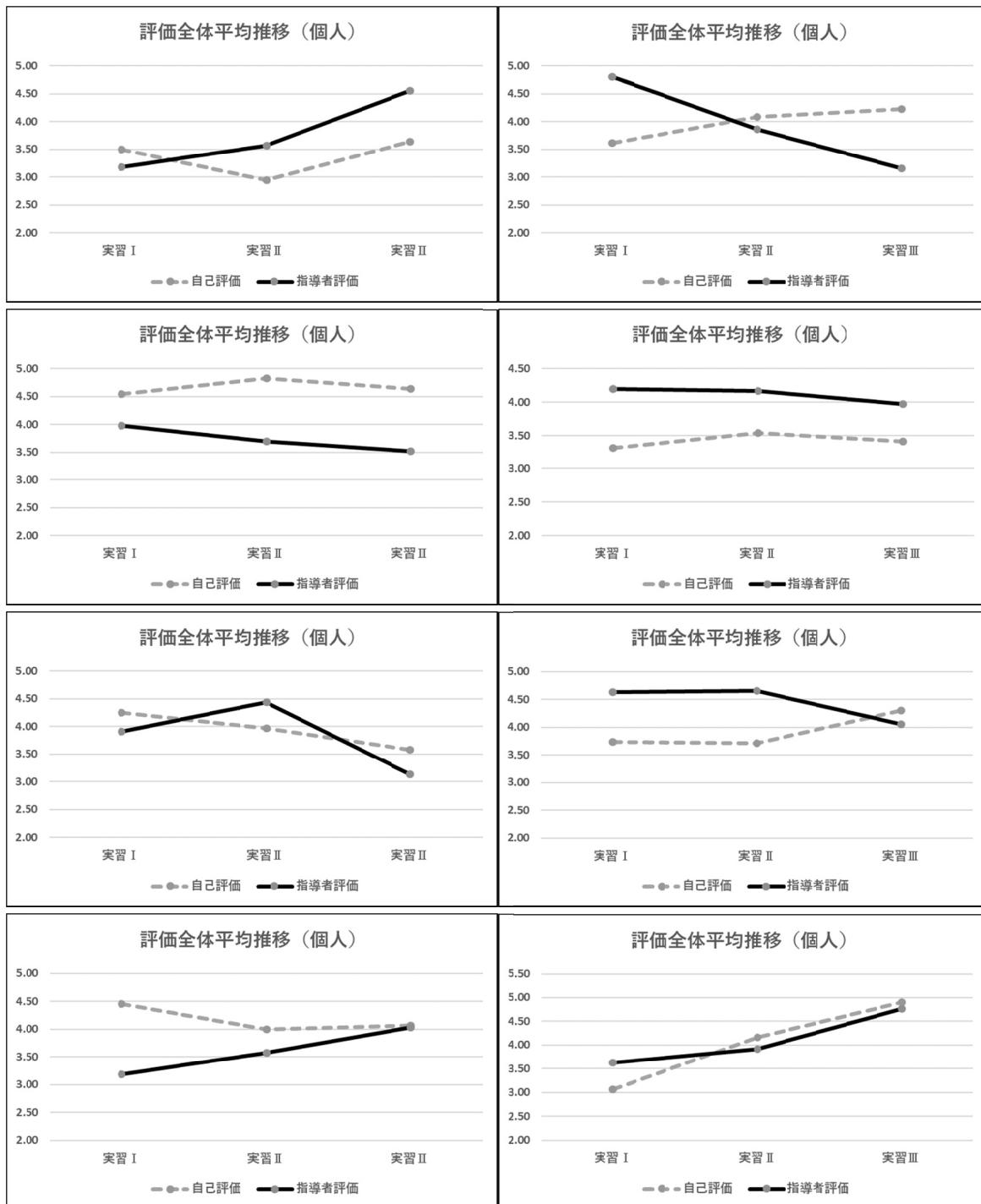


図 19 学生個人の全指標平均の推移から見る様々な成長パターン

ループリックの IR 分析において、日本人学生や留学生を一つの群としてとらえて、学生状況を可視化することに重点をおいてきたが、図 19 のように個々の学生についても成長の変化を見ることができる。ループリックとともに、これらの変化をポートフォリオとして個々の学生ごとに整理しておくこと

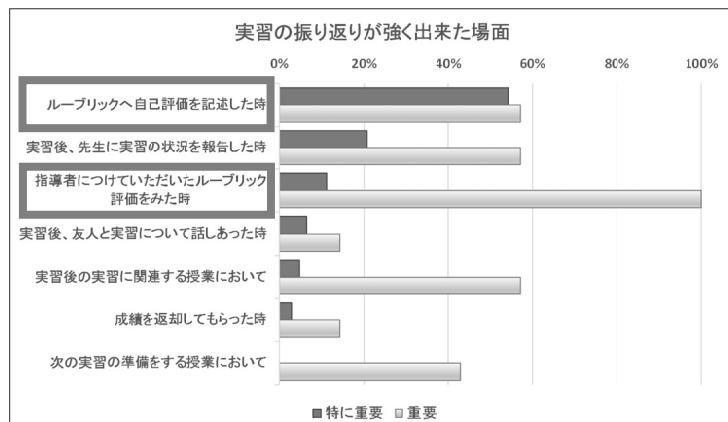
で、効果的に学生を指導するための参考となる情報ではないかと考える。

4. 卒業前アンケートから

2019年度入学生に対し、卒業前の2021年3月7日から3月21日の期間にLMSを使って実習評価についてのアンケート調査をした。目的は、ループリックを使った実習評価が学生の内省機会と成長にどのような影響を与えるか、結果と指導のフィードバックをどのタイミングで学生に返すのが効果的であるかを検討することである。実施時期が遅れたこともあり、31名中回答が7名（留学生5名、日本人学生2名）しかないが参考になると考え結果を紹介する。

4. 1 実習の振り返り場面

図20にあるような選択肢の中で、実習後強く振り返ることができた場面（複数回答有）として、「指導者についていただいたループリック評価を見た時」については全員がそうだと回答した。その中で特に強く振り返ることができた場面は、「ループリックへ自己評価を記述した時」が一番多く、ほぼ6割であった。



★「特に重要」は、複数記載する者があったため一人1件に換算調整した
図20 実習の振り返りが強く出来た場面

4. 2 ループリックによる成長感

自己評価によって自分の力量や課題が理解できたか尋ねたところ、全員が肯定的回答であった。3回ある介護実習のうち、どの実習のループリック評価が自分の成長に有効であったかについては、「実習Ⅱ」が4名、「実習Ⅲ」が1名、「どれも有効だった」が2名であった。実習Ⅱは1年生の終わりの実習であり、2年生に向けての重要な振り返りの機会であると学生が認識しているとわかる。また、自分が成長したと感じた実習を尋ねたところ、「実習Ⅱ」が3名、「実習Ⅲ」が4名であった。実習Ⅱは実習Ⅲに向けて課題を見つける機会であり、実習Ⅲは集大成の場である。学生は、いずれも成長の機会として捉えていたと思われる。

実習が進むに連れての成長感があったか尋ねたところ、4名が「あった」、2名が「ややあった」、1名が「わからない」であった。成長感を感じたのは具体的にどのような時かを尋ねたところ、回答の中に次のようなループリック評価による振り返りが成長の鍵となっていることを示すものがあった。

- ・実習Ⅰ後に自己評価と指導者のループリック評価を見て自分が出来なかった所や出来た所十分理解しました。特に自分から質問してなかつたり、積極的にコミュニケーション取れなかつたり、職員の業務を理解していないなど出来なかつたところを実習Ⅱからそのところをポイントにして実習を受けました。

4. 3 評価結果についての指導

実習指導者からの評価結果が低かった項目について、教員や指導者から指導を受けたかについては、「一度あった」が2名、「全くなかつた」が1名、「覚えていない」が3名、「できていないと指摘された

項目がない」が1名であった。この調査では、詳細はわからないが、「全くなかった」「覚えていない」があり、学生が思うような時に適切な指導を受ける機会が少なかったと推測される。

実習指導者評価の低かった項目に対し、どのタイミングで指導をして欲しかったかを尋ねたところ、「実習中」が6名、「実習後すぐ」が1名であり、指導はできるだけ早くリアルタイムにして欲しいという当然の結果となった。評価結果に対し適切な指導を効果的にする方法を検討していきたい。

実習後のループリック評価により次の実習の直前に自分の改善点や目標を明確にしていたかを尋ねたところ、「明確にしていた」が1名、「やや明確にしていた」が6名と全員が肯定回答であった。ループリックによる評価活動が次の実習に向けた課題を明確にすることに役立っていたと言えよう。

5. 考察

2年間の実習評価を全てループリックで行なった初めての学年に対する2年間3回にわたるループリック評価データをもとに、学生がどのように成長したかを可視化した。また、ループリック評価活動が自分の成長やその後の実習にどう影響があったかを卒業前アンケートで確認した。

指標平均の推移を全体平均の折れ線グラフで（図1）、分布の変化がわかるよう箱ひげ図で（図2）、個々の学生状況を個人平均の分布図で（図3）可視化した。実習Iと実習II、IIIでは実習内容が異なることもあり、変化については、実習Iからというより、実習IIから実習IIIへの変化を特に注視すべきと考えた。図1から全体傾向としては順調に平均値が高くなっていること、留学生の自己評価が実習IIIでは指導者評価に近づいていることなど、良い方向にあったことが見えた。図2の箱ひげ図では、実習IIIで上位学生と下位学生に開きが出ていることがわかる。また、図3、4のように日本人学生と留学生を分けることで、特徴が大いに抽出された。特に日本人学生の自己評価の低さと留学生の高さが際立った。

図5～7の相関の可視化では、相関係数から「正の相関がある」「弱い相関がある」「相関がない」などの群に分け、学生数が留学生と日本人学生で異なることから人数割合を用いた。その結果留学生の半分はループリック評価の評価力がなかった。日本人学生も2割がそうであった。ただし、そのような学生がいても、図8の箱ひげ図によれば日本人学生の多くが弱いながらも相関係数の値が一定の範囲に収まっていた。高い学生はいなかったが全体として低いながらも一定の評価力を持っていることが示された。

図10、11では、5つの領域ごとの成長の変化を見ることができた。特にコミュニケーションの成長があったこと、留学生が実習Iと比べ領域による差が少なくなったことなどの成長がみられた。さらに「実習態度」や「コミュニケーション」領域の中の項目ごとの変化（図12～15）を見ることで、「積極性」に課題があるが成長も見られること、日本人学生の「指導者との意思疎通」に課題があることが明確になった。「介護活動」においても「(受け持ち) 利用者理解」の成長が著しく、介護福祉士としての技量の成長がみられた（図16、17）。図18では、全ての指標を一覧にして折れ線グラフで示すことにより、近傍の領域で特徴的な指標（山になっていたり、谷になっていたり）を探すことによって課題を見つけることができた。また、指導者評価と自己評価の差があれば、その点に注意を向けることができた。一方、個々の学生の自己評価と指導者評価の平均値の変化をプロットすることで、学生の成長のパターンを確認することができた（図19）。

以上のように、ループリックを分析することで介護実習を通じて学生がどう成長していたかを可視化することができ、可視化することで日本人と留学生、学生個々の成長の様子を理解することができた。

卒業前アンケートでは、ループリック評価の自己評価実施が学生にとって大きな振り返りの機会となると学生自身が感じていることがわかった。また、指導者からの評価は全員が内省する機会と捉えており、ループリックによる評価活動が次の実習に向けての課題を明確にする機会となっていることもわかった。課題は、指摘事項についてすぐ指導する場面が少なかったことが示唆されたことである。この点は、指導のタイミングや効果的な指導の在り方について今後検討して改善していく必要がある。

謝辞

高田短期大学高等教育研究会のメンバーの皆様には、ループリックの開発、評価、改善の議論をともに進めることで本報告ができましたことを感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02261 の助成を受けたものである。

参考文献

1. 福田洋子、青木信子、野呂健一、寶來敬章、鷲尾敦 「介護実習におけるループリック評価の提案」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第 3 号、pp.51- 61、2017
2. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷲尾敦 「介護実習評価ループリックの開発」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第 4 号、pp.35-46、2018
3. 福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷲尾敦 「介護実習でのループリック評価の導入による効果と課題」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第 5 号、pp.28-39、2019
4. 鷲尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 「介護実習ループリック評価結果を用いた学生の実習分析」『高田短期大学紀要』第 38 号、pp.23-34、2020
5. 鷲尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 「介護実習 I のループリック評価の検証—3 つの介護実習を通したループリックを目指してー」『キャリア研究センター紀要』第 6 号、pp.28-39、2020
6. 鷲尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章 「ループリック評価から得た介護実習における学生の成長分析の試行」『高田短期大学紀要』第 39 号、pp.15-26、2021
7. 福田洋子、鷲尾敦、野呂健一、寶來敬章 「介護実習の質の向上を目指したループリック改善の取り組みと課題」『キャリア研究センター紀要』第 7 号、pp.28-39、2021
8. 林和歌子、大内義広 「ループリックを用いた介護実習評価法の開発」『城西国際大学紀要』第 26 卷、第 3 号、pp.37-50、2017
9. 宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、重松義成、柊崎京子 「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするループリック評価の施策と活用」『帝京科学大学紀要』Vol.13 pp.77-86、2017
10. 柊崎京子、松永 美輝恵、宮本 佳子、楠永 敏恵、吉賀 成子 「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題：「実習課題ループリック」の作成と活用結果から」『介護福祉学』25 卷 1 号、 pp.1-10、2018